

# 直喩による程度表現の働き

菊地 礼

## 1. はじめに

本稿は状態や属性の程度を限定するために用いた直喩を論じる。状態や属性の程度を限定する直喩とは次の(1) a. のような例である<sup>1)</sup>。以下、本稿では該当例を「程度型直喩」と呼ぶ。

(1) a. 氷のように冷たい肌。 b.  $\phi$ 冷たい肌。

(2) とても冷たい肌。

「冷たい」と明示している以上、冷たさを特徴とした事物である「氷」の表示は重複的であり、(1) b. のように脱落しても肌の属性の表現としては大きな変化が見られない。「氷のように」は(2)の程度副詞「とても」と同様に冷たさが甚だしいことを表しており、限定した程度のもとに表示していると解される。このような直喩はこれまで「強意的直喩」(大山1956、池上ほか編1983、山梨1988)<sup>2)</sup>と呼称され、次のように表現上の働きが記述されている。

自分が伝えようとしている事物そのものは自分も相手も知っているが、その性質を強く相手に伝えたいためにストレートに表現しないで、そのものと程度において共通性を持っている他のものを持ち出して強調する。

(池上嘉彦ほか編1983：p.830)

「強く相手に伝えたい」とあり、受け手への伝達において強調の働きを持つ表現として捉えられている。しかし、程度副詞もまた甚だしさに限定して表す点では強調と言えるものである。「強く伝える」という記述は(1) a. と(2)の表現を弁別するに足るものではない。直喩であるからその表現上の働きについては、『日本語大辞典』の「直喩」の項で次のように記述されている。

この場合(稿者注：「亀のようにゆっくり」)、「たとえるもの」には、たいてい度を越したものが選ばれる。大げさにたとえるのである。そこに生じる「たとえるもの」と「たとえられるもの」との落差が、受け手に印象的な形象をもたらしわけである。

(坂野信彦執筆、p.1387)

「受け手に印象的な形象をもたらし」とあるように喩辞<sup>3)</sup>と対象の落差を用いて聞き手の心にイメージを印象付けるという働きを指摘する。しかし、なぜ(1) a. は氷のイメージを用いて相手に印象付けて程度を限定し、(2)は程度副詞を用いて程度を限定するのかは明らかでない。程度を限定するための語彙項目として程度副詞があるなかで、

あえて直喩によってこのような落差を生じさせてイメージを印象付けて程度を限定する理由を論じる必要がある。本稿は、程度型直喩が持つ程度副詞にはないレトリックとしての働きの解明を目指す。

## 2. 程度型直喩とは

### 2.1 程度型直喩の定義

本節は程度型直喩の定義と分析対象となる表現の規定を行う。まず、本稿は程度型直喩を、イメージを提示する修飾句が状態性の用言（形容詞、状態動詞など）に係り、その用言が表す状態・属性の度合いを限定して表す表現と定義する。

比喩表現におけるイメージは、半沢 (2016) において「言語刺激によって喚起・再生される対象の意図的な表象像」(半沢2016：p.80)と規定される。また、ここでいう「表象像」は視覚的な像に限定されず、「それ(稿者注：視覚)を中心としつつも、他の感覚モダリティ(聴・嗅・味・触覚)に対応するイメージを排除するものではな」(ibid：p.80)いとす。本稿もこの規定に従う。また、程度とは「開放スケールにおける位置」(蔡2017)と定義される。開放スケールとは始点・終点を持たない相対的な尺度であり、大きさや冷たさがある概念的な特性である。開放スケール上の位置を表し、どのような程度を持って存在するかを限定して表示する表現が程度表現となる。一般に開放スケール上の位置を表す語彙項目として程度副詞があり、「ことがら的には形容詞(状態言)の程度を限定しつつ、陳述的には肯定の平叙の文に用いられる」(工藤2016：p.119)という特徴が指摘されている。程度型直喩も状態や属性といった相対的な尺度で決まるスケールを持つ用言を被修飾部取る。

(3) 泣き声を出すまいと一生懸命に力こぶを入れ、そのために石のように堅くなっているのに違いなかった。

(サンプルID：PB49\_00548 井伏鱒二「釣りの楽しみ」)

(4) 血のように赤い夕焼けを映す鏡湖に、それらの船影がまだら模様を描き、湖面は朱儁がまだかつて見たことがないほど毒々しい色彩になっている。

(サンプルID：PB39\_00502 宇佐美明浩『中国遊俠伝』)

(3)は力こぶの硬さの甚だしさを「石」と表す。硬度は、特定の値を超えた場合に「硬い」と認定されるような絶対的基準によって計測されるものではなく、他との比較から相対的に測られる属性である。(4)は夕焼けの赤さの濃さを「血」と表す。「赤い」のような色彩形容詞であれば色相のある点を取ることで典型を示すことはできるが、どの彩度を越えたものがより濃い赤であると認定することは難しく、色の濃さもまた相対的に決まる。

### 2.2 分析対象となる表現

程度型直喩は用言の有するスケールに関わるという性質上、「AのようにB」という連用修飾構造の構文を主に取る。

(5) a. 肌は雪のように冷たい。 b. 雪のように冷たい肌。

(5)a. と(5)b. はともに喩辞「雪のように」が「冷たい」へと連用修飾を行う。それによって程度を限定した冷たさを表す句「雪のように冷たい」が形成される。これを題目に対する性質の規定とした(5) a. と被修飾名詞に対する規定として用いた(5) b. のような表現を分析対象とする。

連用修飾表現の直喩の中でも(6)(7)のような例は本稿の分析対象から除く。

(6) 少女は少し得意げになって、歌うように語りはじめました。

(サンプルID: PB2n\_00136 竹田弘『星をまく人』)

(7) 花火のようにはじける噴火のようすを、カメラやビデオにおさめては、感心している。

(サンプルID: PB1n\_00024 広鱈恵利子『命を救え! 愛と友情のドラマ』)

(6) は人の行為を表す動詞が後続しており、(7) は物の動きを表す動詞が後続している。このような例は「その対象の性質、形状、様態を特別の誇張をとまわずにたとえる」(山梨1988: p.181) 表現である「記述的直喩」(池上ほか編1983、山梨1988) と呼ばれるものであり、程度型直喩と区別する。また、次の(8) a. や(9) a. のように「ような」による連体修飾表現においても程度の甚だしさの表示は行われるが、これらも分析対象から除く。

(8) a. 氷のような肌。 b.  $\phi$ 肌。

(9) a. 氷のような冷たい肌。 b.  $\phi$ 冷たい肌。

(10) \*肌は氷のような冷たい。( \* は非文を表す)

(8) a. は「肌」を「氷のような」によって連体修飾し、肌が冷たいことと同時にその甚だしさを表す。一方で、「氷のような」が脱落した(8) b. では甚だしさだけでなく、冷たさも脱落する。(8) a. における「氷のような」は状態とともに程度を表示していることが分かる。また、(9) a. も肌の冷たさとその甚だしさを表すが「氷のような」を脱落させた(9) b. は形容詞「冷たい」によって肌が冷たいという状態の存在は保持される。その点で(5) b. と近似する。しかし、(9) a. の「氷のような」は名詞句「冷たい肌」に係り、「冷たい肌」の様相を規定する成分として働いており、直接的に形容詞には係らない。そのため、(10) のような構文が許容されない。一方で、(5) b. の「氷のように」は「冷たい」に係り、そのスケールを表すために働く。本稿はこのような係り受けの違いから(8) a. と(9) a. のような連体修飾表現「AのようなB」「AのようなB・C」を分析対象から除く。

### 3. 調査

本節は以上に規定した分析対象となる表現について、出現分布、被修飾部の用言、喩辞の三点を調査する。また、程度副詞との比較を行い、両者の差異を見ることで直喩の程度表現としての特徴を明らかにする。比較対象は「とても」である。これは「とても」が甚だしさを表す程度副詞として高い頻度で出現することから、典型例と判断したためである。

### 3.1 出現分布

2節に規定した特徴に該当する表現を「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)から収集した。検索アプリケーション「中納言」を用い、語彙素「様」をキーとして検索し、収集された助動詞「ようだ」例から直喩用法を選別し、23,262例を得た。そのうち、連用修飾として用いた11,674例から程度表現と解釈できる直喩例を選別することで166例を得た。「とても」はBCCWJにて語彙素「迎も」をキーとして、後方共起条件を「品詞／大分類／形容詞」によって検索した5,670例と「品詞／大分類／動詞」によって検索した2,403例を合わせた8,073例を対象とする<sup>4)</sup>。この程度型直喩166例と「とても」8,073例のテキストジャンルの分布を示したものが表1である<sup>5)</sup>。上位10ジャンルを用例数の降順に並べ、全例に占める割合を付した。

表1：程度型直喩と「とても」のジャンル分布(上位10ジャンル)

程度型直喩			「とても」		
ジャンル	用例数	割合(%)	ジャンル	用例数	割合(%)
文学	107	64.5	Yahoo! ブログ	1,775	22.0
ベストセラー	11	6.6	文学	1,675	20.7
歴史	9	5.4	Yahoo! 知恵袋	1,510	18.7
Yahoo! ブログ	5	3.0	社会科学	569	7.0
社会科学	5	3.0	ベストセラー	340	4.2
分類なし	5	3.0	雑誌	331	4.1
雑誌	4	2.4	芸術・美術	319	4.0
哲学	4	2.4	歴史	314	3.9
芸術・美術	4	2.4	自然科学	248	3.1
技術工学	3	1.8	技術工学	229	2.8
その他	9	5.4	その他	763	9.5
合計	<b>166</b>	100	合計	<b>8,073</b>	100

程度型直喩は「文学」が107(64.5%)例であり、突出して用例数の多いことが分かる。他のジャンルは「ベストセラー」の11(6.6%)例を除けば、用例数は10以下となる。また、文学に関わるテキストであっても「韻文」への出現は1例であり、表1の圏外となる。このことから、程度型直喩は主に文学テキスト、特に散文作品に用いられることが分かる。

一方で、程度副詞「とても」は「Yahoo! ブログ」の用例数が1,775(22.0%)例と最も多く、次に文学が1,675(20.7%)例で第二位となり、「Yahoo! 知恵袋」の1,510(18.7%)例が続く。つまり、「とても」は「Yahoo! ブログ」や「Yahoo! 知恵袋」といったインターネット上の打ち言葉として用いられやすいことを意味する。特に、ブログ記事は書き手の体験を整理して不特定の読み手に発信するものであり、山崎(2009)が指摘するように『『書き手が何を書きたいか』が優先され』(p.68)る性質を持つ。個人的な体験や感情を発信し、読み手にそれを正確に理解されることに重点を置かない性質のジャンルに「とても」は出現している。

### 3.2 被修飾部の状態・属性の特徴

程度型直喩と「とても」における被修飾部の状態・属性を確認する。BCCWJから収集した程度型直喩と「とても」の被修飾部に用いられた用言<sup>6)</sup>を整理し、上位10例を表2に示す。

表2：程度型直喩と程度副詞の被修飾部  
(上位10例)

程度型直喩は、相対的なスケールを持つ属性の中でも、「冷たい」「固い」「熱い」「暑い」「寒い」「冷え切る」のような皮膚感覚による情報や「赤い」「大きい」「巨大だ」のような視覚による情報といった外界の事物との接触によって発話主体が知覚する状態・属性を被修飾部に取ることが多い<sup>7)</sup>。

程度型直喩	用例数	「とても」	用例数
冷たい	44	嬉しい	431
固い	26	美味しい	379
熱い	24	いい	308
美しい	11	楽しい	274
暑い	6	可愛い	182
赤い	4	できる	162
大きい	4	難しい	160
巨大だ	3	面白い	157
寒い	3	よい	150
冷え切る	3	優しい	127

一方で、程度副詞「とても」は「嬉しい」「楽しい」のような感情に関わる形容詞、「いい」「難しい」「面白い」「よい」のような評価に関わる形容詞といった発話者の心理に関わる語を被修飾部に取りやすい。

(10) 午前7時四十分頃から午前8時頃までが、中高生の通学時間のピークだ。よく挨拶をする小中高生が多いので、とても嬉しい。

(サンプルID：OY03\_11823 Yahoo!ブログ)

小中高生から挨拶を受けることについて「嬉しい」という感情を表明した文であり、嬉しさの感情の甚だしさを「とても」によって表している。このような感情や評価といった心理的な状態の度合いを修飾することの多い「とても」に対して、身体感覚に関わる状態・属性の程度を限定することが程度型直喩の被修飾部の特徴となる。

### 3.3 喩辞の特徴

3.2節に確認したような身体感覚に関わる状態・属性のスケールを程度型直喩がどのようなイメージによって限定しているかを見る。直喩においてイメージは喩辞に託されるものであるため、表3にBCCWJから収集した程度型直喩の喩辞を整理した。

表3：程度型直喩の喩辞(用例数2以上、カッコ内は用例数)

喩辞の品詞	喩辞
名詞	氷(41) 石(22) 鬼(9) 絵(9) 火(6) 山(6) 岩(5) 血(4) 夢(3) 糸(2) 地獄(2) 鉄(2) 化け物(2) 天使(2)
動詞(句)	燃える(18) 凍る(4) 凍える(3) 凍てつく(2) 凍り付く(2) 身を切る(2) 焼け付く(2) 焼(灼)ける(2)

喩辞はその品詞から「氷」「石」のような名詞と「燃える」「身を切る」のような動詞(句)に分かれる。以下、名詞を喩辞とするタイプと動詞(句)を喩辞とするタイプごとに見る。

### 3.3.1 名詞を用いた喩辞

冷たさの甚だしさを表すために氷を喩辞に用いるように、「AのようにB」において名詞Aが喚起する事物・事柄を用いて被修飾部Bが表す状態・属性を限定するパターンである。喩辞に用いる名詞は、(11)のような実際に接触し得る事物、(12)のような実際には接触できないが社会・文化的に共有されたイメージを持つ事物に分かれる。

(11) タケルの甲冑には戦塵の匂いが染みついている。若い王子はそれだけで圧倒され身体は石のように硬くなった。

(サンプルID：PB29\_00391 黒岩重吾『白鳥の王子ヤマトタケル』)

(12) 彼の場合はエアコンだけにとまらず、ヒーターまでもはずしてしまった。その結果、夏は地獄のように暑く、冬は凍死寸前の寒さを体験できるステキな居住空間となってしまったそうだ…。

(サンプルID：PM55\_00022 『OPTION2』2005年3月号)

(11)は緊張した体の硬さを喩辞「石」によって表す。「硬さ」は相対的であり、どれほどの硬度でもって「硬い」と認定するかには個人差がある。一方で石は身近な事物であり、その硬度は多くの人に共有されている。そこで、硬さにおいて誰もが想起できる石のイメージを用いることで、当該の身体の硬さの甚だしさの想起を容易にしている。一方で、(12)は「地獄」という実際には接することのできない空想上の場所を喩辞に用いる。「地獄」は<熱などによる過酷な苦しみを与える場所>という社会・文化的に共有されたイメージが存在する。そのため、「地獄」を喩辞とする程度型直喩は暑さや苦しさを表す用言と共起する。(11)のように身近な事物でなくとも、社会・文化的に共有されたイメージを用いて(12)における過酷な暑さを表す。次の(13)の「鬼」は空想上の事物であるという点で「地獄」と同様である。しかし、「地獄」と暑さのような共起は確認されず、共起する語の種類が多い。

(13) 東武は鬼のように混んでました。帰りにTSUTAYAでアホなほどDVDとCD借りたので、今から引きこもります。

(サンプルID：OY04\_06154 Yahoo!ブログ)

(14) その塾頭さんが鬼のように厳しく若い修行者を鍛えた。

(サンプルID：PB31\_00086 松原泰道『洗心』)

「鬼」はもともと(14)のように厳しさの甚だしさを表すことが主であったが、現在では(13)に見られるように厳しさに限定されない多様な状態・属性の程度を限定することができる。これは名詞「鬼」のイメージのうち「力の強大さ」のような甚だしさに関わる性質が取り立てられることで厳しさだけでなく、幅広い状態や属性に適用可能になったのだと推測される。ゆえに、次の(15)のように直喩ではない形式への変換が可能である。

(15) 来週からまた鬼忙しいから少し飲みいきたいなー(Twitter：2021/8/12)

以上のように、名詞を喩辞とした程度型直喩は、石のように誰もが接した経験のある事物・事柄や「地獄」「鬼」といった社会・文化的に形成されたイメージを有する事物・

事柄を用いており、受け手が想起しやすいイメージを用いていることが分かる。

### 3.3.2 動詞(句)を用いた喩辞

熱さの甚だしさを「燃えるように」と表現したり、寒さの甚だしさを「身を切るように」と表したりするように動詞や動詞句を用いて程度を限定するパターンである。このような動詞(句)は極端な事象を提示する。しかし、それは突飛なものではない。動詞(句)が表す動きや変化は時間的な推移を持つため、因果関係を形成し得る。たとえば、「燃える」は温度上昇によって引き起こされる事象であり、熱さとの因果関係を有する。このような「AのようにB」におけるAとBの因果関係を用いて、極端ではありながらも想像の容易な事象によって程度の甚だしさを表現する<sup>8)</sup>。

(16) その年は冬が来るのが早かった。旧暦十月初旬になると、朝晩は身体が凍りつくように冷え込んだ。

(サンプルID：LBe9\_00172 黒岩重吾『聖徳太子 日と影の王子』)

(17) 頭が割れるように痛い。海藤兼作が踊り場の手すりにもたれ、頭を抱えた。

(サンプルID：LBc9\_00040 逢坂剛『さまよえる脳髓』)

(16) は冬の冷気による体温の低下の甚だしさを喩辞「凍りつく」によって表す。「凍りつく」というのは低温によって生じる状態の変化である。ここで変化する主体として「身体が」と明示することで、体が凍り付くという実際には発生し得ない極端な状況を読み手に仮想させる。身体が凍るという極端な状況を想像することで当該の甚だしい気温の低さを理解しやすいものとする。動詞(句)を喩辞に用いるパターンでは(16)のような温度感覚に関わる甚だしさを表すことが多いが、(17)のように痛みなどの身体感覚の甚だしさを表すこともある。(17)は頭痛の甚だしさを「頭が割れるように」と表現する。頭が割れるという現実にはほぼ起き得ない事象を提示し、その極度の痛みを仮想させることで当該の頭痛が度を越えたものであることを表す<sup>9)</sup>。

このように動詞(句)を喩辞に用いた程度型直喩は、現実には発生し得ない極端な事象を提示することで、受け手に身体的な感覚を仮想させながら程度を伝える表現であることが分かる。そして、その事象は突飛なものではなく、被修飾部の状態・属性と因果関係を持っていることで理解を容易にしている。

## 4. 程度の解釈の一致

ここまで論じたことを踏まえると程度型直喩は、主に小説などの文学テキストに用いられ、身体感覚に関わる状態や属性の程度を限定し、誰もが接した経験のある事物・事柄、社会・文化的に共有されたイメージを持つ事物・事柄、因果関係を持った極端な事象を喩辞に用いることが特徴となる。

特に喩辞は身近なもの、共有されたもの、因果関係を持った事象など誰もが理解の容易なイメージを用いている。このようなイメージを用いるのは、相対的な尺度の認定が人によって異なるため、書き手の意図と受け手の理解の一致を図るためである。

- (18) どうでもいいけどともかくつけておかなくてはと、焼き肉屋におけるゼミの教授とスンシンとの会話のなかで頻繁に出ていた敦史の名前を持ちだし、かれとはとても仲がいいといった。(中略) とてもとはどれくらいとてもなんやといった。(サンプルID：LBt9\_00038 玄月『異物』)

「とても仲がいい」と関係性の良好さを伝えるが、その具体的な仲の良さは「とても」では伝わらない。ゆえに、「とてもとはどれくらい」という問い返しがなされる。このように程度副詞による程度の限定は発話者にとっての位置付けを表すものであり、受け手がその程度の具体相を理解するものではない。表2に見たように、読み手への意識が薄く、書き手の感想を連ねるブログなどでは「とても」が好まれる。しかし、程度型直喩は小説のような文学テキストに用いられ、かつ人の身体感覚に関わる属性や状態の程度を限定する。文学テキストは、読み手には事前に共有されていない世界や人物の営みを不特定の読み手が理解できるように書く必要がある。ゆえに、書き手がどのように書きたいかだけでなく、書き手が書こうとする人物の身体感覚を読み手が理解できるようにする必要がある。そこで、誰もが想像できるイメージを用いて送り手の意図と受け手の解釈のズレを小さくする。

- (19) 豪雨が滝のように激しい音をたてて降りつけ、私は全身ずぶ濡れになっていた。(サンプルID：PB59\_00355 瀬戸内寂聴『釈迦』)

滝の落ちる轟音を提示することで当該の雨音の激しさの尋常でない様子を描出する。以上のように程度型直喩は程度という相対的な概念的特性を誰もが理解するイメージによって表すことで送り手の意図と受け手の解釈を一致させるための方略と位置付けられる。このような性質を利用して、身体感覚を伴わない比喩的に用いられた「冷たい」「熱い」などを修飾することもある。

- (20) 青みをおびて、氷のように冷たい光を放つ刀身をじっと見つめながら、幻十郎は心の裡で亡き父へ手を合わせていた。

(サンプルID：PB19\_00096 黒崎裕一郎『冥府の刺客』)

刀身が放つ光の冷やかさを「氷のように」と表している。光に対して冷たさを肌で知覚することはなく、幻十郎の印象である。印象という心理的な情報へと擬似的に身体感覚を付与するために氷のイメージが喚起する冷たさを用いる。このように程度型直喩は、誰もが理解し得るイメージを提示することで状態や属性といった事物・事柄の抽象的な側面を具体的に伝達する。つまり、程度という不可視の範疇を目の前に見るように表現することを可能とする働きを持つのである。

## 5. おわりに

本稿は、直喩を用いた程度表現について論じた。状態や属性の程度は相対的な尺度によって決まるものであり、送り手の意図した内容が必ずしも受け手に十全に解釈されるものではない。甚だしさを程度副詞によって表す場合、あくまで発話者の基準において甚だしいことを表し、受け手にとってはその甚だしさの具体相は不明確である。

それに対して、程度型直喩は、誰もが想像できるイメージを提示することができる。これによって、送り手の意図と受け手の解釈を一致させることができる。そのため、文学テキストのように描かれている世界や人物の身体感覚を不特定の読み手が思い浮かべることが重要なテキストに主に出現する。

このような特徴はコーパスによって収集した用例から帰納したものである。これらが今回の調査によって収集されなかった慣用的表現にも適用可能であることを証することは今後の課題となる。

#### 参考文献

- 池上嘉彦・松浪有・今井邦彦編(1983)『大修館英語学事典』大修館書店。  
大山敏子(1956)『英語修辞法』篠崎書林。  
工藤浩(2016)『副詞と文』ひつじ書房。  
蔡薰婕(2017)「スケール構造を用いた程度修飾・数量修飾の分析—『ほど』『分』を対象として—」『日本語の研究』13巻2号、pp.18-34：日本語学会。  
佐藤武義・前田富祺(2014)『日本語大辞典』朝倉書店。  
多門靖容(2006)『比喩表現論』風間書房。  
半沢幹一(2016)『言語表現喩像論』おうふう。  
山崎絢子(2009)「ネット日記における対読み手意識—ブログとSNSを材料にして—」『国文』112号、pp.59-69：お茶の水女子大学国語国文学会。  
山梨正明(1988)『比喩と理解』東京大学出版会。

#### 用例の出典

- 国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス(ver.1.1)」  
(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>) 検索アプリケーション：「中納言」
- NINJAL-LWP for BCCWJ(<https://nlb.ninjal.ac.jp/>)
- Twitter(<https://twitter.com>)

#### 注

- 1) 本稿は分析対象となる直喩の例に下線を引き、直喩以外の分析対象には二重線を引く。出典には「BCCWJにおけるサンプルID」「著者名」「書籍名」を付した。また、Twitterの用例にはツイートの年月日を付した。出典を付していない用例は作例である。
- 2) 強意的直喩は程度だけでなく「山のようなお菓子」のような量、「夢のような時間」のような評価にも関わる。これらの例との区別のため「程度型直喩」と呼称する。
- 3) 本稿は喩えに用いる事物・事柄を表す語句を「喩辞」と呼ぶ。
- 4) 「とても」と同様の条件で検索を行い、甚だしさを表す他の程度副詞の用例数を調べると、「かなり」7,374例、「非常に」5,387例、「凄く(凄い)」3,857例、「極めて」2,403例、

「大変」2,238例となる。

- 5) テキストジャンルはBCCWJにおけるレジスターである「出版」「図書館」「特定目的」の下位区分を用いた。「出版」および「図書館」レジスターに含まれる「書籍」はNDC分類順に「総記」「哲学」「歴史」「社会科学」「自然科学」「技術・工学」「産業」「芸術・美術」「言語」「文学」「分類なし」へと分かれる。これらは「書籍」「図書館」それぞれの値を合算した。「特定目的」は「白書」「ベストセラー」「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」「法律」「国会会議録」「広報誌」「教科書」「韻文」に分かれる。また、「出版」は「書籍」のほか、「雑誌」「新聞」に分かれる。
- 6) 「とても」の被修飾部は「NINJAL-LWP for BCCWJ」の検索結果を参照した。「とても+形容詞」「とても+動詞」における「コロケーション」の頻度上位10例を挙げた。
- 7) 程度型直喩が文学に突出して出現することから、これらの用言が文学テキストに特徴的な形容詞である可能性がある。そこで、BCCWJにて検索対象を「文学」に限定し、「品詞／大分類／形容詞」をキーとして検索すると、「無い」「良い」「悪い」「早い」「大きい」「長い」「強い」「深い」「若い」「高い」が上位10例となる。上位例として「大きい」以外の重複はなく、表2は程度型直喩に特有の被修飾部であると見られる。
- 8) 一般に、因果関係をはじめとした隣接性に基づいた比喩表現は換喩と呼ばれる。しかし、多門(2006)に指摘されるように直喩においても隣接性に基づく表現がある。ここで論じる動詞(句)を喩辞に用いた程度型直喩もそのような表現の一種となる。
- 9) なお、(16)は「冷たい→凍り付く」とBを条件としてAが導かれるが、(17)は「頭が割れる→痛い」とAを条件としてBが導かれる。このように動詞(句)を喩辞に用いた「AようにB」における因果関係は「A→B」「B→A」の両者が存在する。

#### 付記

本稿は2020年10月31日に開かれた第155回表現学会東京例会での発表「直喩の運用類型—構文上の機能に着目して—」及び2021年6月12日に開かれた第219回青葉ことばの会での発表「いわゆる『強意的直喩』の表現価値について」をもとにしたものである。また中央大学大学院文学研究科に提出した博士学位申請論文『現代日本語における直喩の構文論的研究』の一部を加筆・修正したものである。

(東京成徳大学〔非〕)